

## 甲状腺外科草子 5

### 平安時代の頭頸部疾患：徒然草

杉野 圭三

大昔の病気や疾患に関する記録は稀だが、徒然草に興味深い記述がある。



島内裕子訳



大阪府立図書館蔵

**42段：**唐橋中将と言ふ人の子に、行雅僧都（ぎょうがそうづ）とて、— 中略— 目・眉・額なども腫れ惑ひて、打ち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面の様に見えるが、ただ恐ろしく、鬼の顔になりて、目は頂の方に付き、額の程、鼻に成りなどして — 中略—。

**概略：**唐橋中将という人の子に、行雅僧都という人がいた。鼻がふさがり、呼吸もしにくくなり、目・眉・額などが腫れ、物が見えなくなった。顔は二の舞の面のような、恐ろしい鬼の顔のような形相で、目や鼻は額のほうについてしまった。

この病気は何？頭頸部悪性腫瘍のようだが、甲状腺未分化癌の可能性は低そうである。病悩期間不明だが、具体的な記述がされ、頭頸部・耳鼻咽喉科領域の疾患と考える。

**53段：**これも仁和寺の法師、童の法師に成らんとする名残とて、各々遊ぶ事有りけるに、酔ひて興に入いる余り、傍らなる足鼎（あしがなへ）を取りて、頭に被きたれば、詰る様にするを、鼻を押し平めて顔をさし入れて、舞ひ出でたるに、満座興に入事限り無し。暫し奏でて後、抜かんとするに、大方抜かれず。酒宴事醒めて、いかゞはせんと惑ひけり。と

かくすれば、頸の周り欠けて、血垂り、たゞ腫に腫れ満ちて、息も詰まりければ、打ち破らんとすれど、容易く破れず、かゝるほどに、或る者の言ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ、力を立てて、引き給へ」とて、藁の稽（しべ）を周りに差し入れて、金を隔てて、頸も千切るばかり引きたるに、耳・鼻、欠け、穿（う）げながら、抜けにけり。

**概略：**酔っぱらった坊さんが、三本足のカナエを頭にかぶり顔を無理矢ねじ込み踊りだした。頭を外そうとしたが、抜けず、引っ張っていると、首のまわりの皮が破れて血みどろになり、ひどく腫れて首のあたりが塞がり苦しんだ。ある人が「耳と鼻がぶち切れても、たぶん死なないから力一杯、引き抜くしかない」と言い、金属部分に肌が当たらないよう、藁を差し込み、思いきり引っ張り、耳と鼻が陥没したが抜けた。

酔っ払いの悪ふざけはいつの世も同じ様である。この様な顔面浮腫は致命的な状況になる危険性が高く、皮膚の周りにクッションの藁を置いて、力任せに除去したのは当時としては最善の選択だったと思われる。紙面の都合上、かなり省略したが詳細な記述であり興味深い。

徒然草は随筆の中でも、平安時代の興味ある出来事が多数述べられ、「ツレヅレニア」ともいうべき多くのファンがいる。

数多の本の中でも、島内裕子による校訂・訳は解釈と時代背景評価が最も優れ、かつ読みやすいので絶対にお勧めである。

#### 参考文献

兼好。徒然草、島内裕子校訂、訳。ちくま学芸文庫、2010。

（一 甲状腺外科医の徒然なる随想）

2021年11月2日